A県におけるブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親の困難性に関する調査研究
――親の取り巻く環境における３つのレベルからの分析を通じた社会的支援の課題の導出――

菱田　博之[i]

本稿は，A県のブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親へのインタビュー調査結果について，両者に共通の困難性を分析し，その上で，障害児の親に固有の困難性を明らかにすることを目的としている。分析的視角として，彼らの困難性を，ミクロ・メゾ・マクロレベルの視点から考察している。インタビュー調査を通じ，健常児および障害児の親に共通する困難は，ミクロレベルでは，言語的・経済的・文化的な課題に直面している。メゾレベルでは，家族や同胞とのインフォーマルな支援が中心であり，地域社会とのつながりが希薄であることや，保育や教育に加え，自治体のサービス全般へのアクセシビリティに困難を抱えている。マクロレベルでは，日本の労働市場における在留資格による労働力としての外国人の在り方が，ブラジルにルーツを持つ親の生活に影響を与えている。障害児の親については，日本語コミュニケーションの困難性が子どもの障害理解に影響を与えていることや，子どものケアのために就労が制限されること，特別な教育的ニーズへの葛藤が，心身への負担となっている。今後，地域共生社会を構想する際に，本稿の知見を踏まえ，彼らの困難性の実態が，社会的支援の対象として認識される必要がある。

キーワード：ブラジルにルーツをもつ親，健常児の親，障害児の親，日本語コミュニケーション，地域社会での孤立，在留資格

１．目的と背景

本稿は，A県のブラジルにルーツをもつ[1)]健常児および障害児の親へのインタビュー調査について，両者に共通の困難性を分析し，その上で，障害児の親に固有の困難性と，社会的支援の現状と課題を明らかにすることを目的としている。

1990年の入管法の改正により，新たな在留資格として「定住者」が創設され，現在までおよそ30年にわたり，南米の日系人とその家族をはじめとする，ニューカマーと呼ばれる人々が多く来日するようになった。2022年３月末時点で，日本国内には204,879人のブラジルにルーツをもつ人々が住んでおり，国籍別では中国，ベトナム，韓国，フィリピンに次いで５番目に多く，在留外国人に占める割合は約7.4％となっている（法務省，2022）。また，ブラジル国籍の人々のうち，「永住者」，「定住者」，「特別永住者」を合わせた人数は，韓国，中国，フィリピンに次いで４番目に多く，181,425人となっている（法務省，2022）。つまり，日本に滞在するブラジル国籍の

i　立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程
飯田短期大学幼児教育学科

人々のうち，約９割が，日本において長期にわたり居住し，就労できる権利を有している。

Ａ県は，製造業が盛んであり，外国にルーツをもつ人びとが多く定住している。2022年４月時点のＡ県の在留資格別人口では，定住者において，ブラジル国籍は１位，永住者に関しては，中国籍に次いで２位である。つまり，ブラジルにルーツをもつ親を対象として得られた知見は，Ａ県における定住外国人の生活実態や課題を一定程度明らかにすることができるといえよう。

ブラジルにルーツをもつ親は，地域社会での生活において，子育てに関する様々な困難性を抱えている。具体的には，①日本語教育体制の脆弱性（富谷 2010），②就労における日系ブラジル人を中心としたニューカマーに対する労働市場側の“nikkeijin”というエスニシティをもつ特殊な「労働力商品」としての受け入れ（大久保 2005:5），③梶田ら（2005）が指摘するニューカマーの人々の特殊な就労ネットワークの在り方，④教育において特別なニーズ教育を実施する上での体制構築にかかわる矛盾，⑤医療・福祉・社会保障に関して国際人権Ａ規約が定める「内外人平等」の原則との矛盾の５点が挙げられる。

しかし，現在日本が進めている各種子育て支援施策は，その実施に当たっては，少子化対策が重点化されており[2)]，ブラジルルーツをはじめとする，外国にルーツをもつ親への支援の視点が欠落している[3)]。

また，ブラジル人コミュニティは，ニューカマーのエスニックコミュニティとして多く研究されている一方，日本での社会生活を進めるには，コミュニティとしての機能の不十分さが指摘されている（永吉，2021）。換言すれば，本稿の対象であるブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親は，日本の子育て施策の対象として，またコミュニティにおいて十分に包摂されておらず，厳しい状況に置かれている可能性が高いといえよう。

そのような多様化・複雑化した社会的課題の解決に向けた実践として，ソーシャルワークが果たしてきた役割は大きい。ソーシャルワークのグローバル定義（2014）によれば，ソーシャルワーカーは，「人々の希望・自尊心・創造的力を増大させることをめざすものであり，それゆえ，介入のミクロ－マクロ的，個人的－政治的次元を一貫性のある全体に統合する」と謳われている。つまり，ソーシャルワークでは，対象者をエンパワーし，支えるための支援を，ミクロ・メゾ・マクロレベルの視点から多面的・包括的に検討するとともに，社会の変革や発展を目指すための実践が目指されている。

一方，日本は，2021年より「重層的支援体制整備事業」を始めている。それは，地域社会において，誰もが取り残されず，活躍できるような「地域共生社会」を実現するための施策である。そのような施策の整備が求められる理由として，地域社会における共同体の弱まりや，非正規雇用などによる生活の不安定化が指摘されている。そして，地域共生社会の実現には，市町村におけるすべての地域住民の多様化・複雑化した課題を対象とし，従来のような課題ごとの対応を超えた全体性・包括性ともいうべき視点からのアプローチが必要とされている[4)]。しかし，上記で述べたように，ブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親は，地域社会や，子育て支援に関する諸施策の狭間に置かれている。

彼らは，様々な社会的支援を受けることに困難があり，地域社会において周縁化された対象といえよう。

先行研究では，彼らの多様化・複雑化した困難性に対し，その重層性や，社会的支援における専門性の担保の必要性が指摘されている（高橋脩 2018，南野 2018，菱田 2021；2022）。

高橋脩（2018）は，外国にルーツをもつ障害児と家族の困難について，障害と，異文化での生活による困難との重なりを指摘し，日本人と比べて「生活文化の違いによる支援上の問題」「親とのコミュニケーションバリア」「発達評価の困難性」という３点について，より深刻な状況が生じるとしている。その上で，彼らへの社会的支援に向け，合理的配慮をふ

まえた支援の重要性を指摘している。

南野（2018）は，日本における外国にルーツをもつ障害児と親の困難について，十分な知見が積み重なっていないとし，支援における専門性や連携の必要性を指摘している。その上で,「支援を提供する立場にあるものは，家族の生活構造，障害そのものの判断や支援に関する知識，社会資源に関する情報を有することが必要であり，多様な側面に対する理解と支援の提供が重要である」（南野 2018：343）と述べている。

また，菱田（2021；2022）は，中国・ブラジルにルーツをもつ障害児の親に対し，当事者視点から見た困難性の詳細についてのインタビュー調査を通じ,「コミュニケーション」,「制度やサービス」,「ライフサイクル」における支援という３つの観点から考察している。そこでは，コミュニケーション手段の保障，ニーズに基づいた制度やサービスの提供，障害児と親へのライフサイクルを通じた支援という３つの困難性が重層することで，彼らが日本社会から排除され周縁に追いやられやすいことを明らかにしている。

これらの先行研究で指摘された多様化・複雑化・重層化した困難性には，先述したソーシャルワークによる介入や，重層的支援体制が求めている，領域ごとの支援を超えた，全体的・包括的支援の提供が必要である。先行研究での高橋脩（2018）や，南野（2018），菱田（2021；2022）の指摘は，外国にルーツをもつ障害児の親が直面する困難性を多面的に指摘し，それらの重層性を踏まえた専門的支援の必要性を主張している。しかし，それらの主張は，障害児の親の複数の困難の重層性を並列的に指摘するにとどまっている。また，健常児の親との困難性を比較したうえで，より多様化・複雑化しているとみられる障害児の親固有の困難を踏まえた視点の提示も必要である。

したがって本稿は，地域社会に包摂しうるための社会的支援の課題を導出するために，彼らの困難性を捉え，その全体像を，ミクロ・メゾ・マクロから分節化し，その構造を明らかにする。そして，制度の狭間によって十分支援されていない対象である，外国にルーツをもつ障害児の親の多様化・複雑化した困難性を，健常児の親と比較して明示する。

上記を通じて，重層的支援体制の構築に向け，複雑化・多様化した課題に対する具体的支援の実現に資する政策的知見を提示できると考える。

２．分析的視角

上記で述べてきた通り，本稿の対象であるブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親の子育てにおける困難性の構造は，十分に明らかになっていない。したがって，マクロレベルである制度・政策や，メゾレベルにおける地域社会における支援の実態，そして，ミクロレベルにおける彼らが直面する具体的な困難性を整理する必要がある。

本稿では，彼らの困難性を，ミクロ・メゾ・マクロそれぞれのレベルに整理し，その実態の把握を試みる。

本稿における各レベルの定義については，以下のとおりである（図１）。ミクロレベルの視点とは,ブラジルにルーツをもつ親が日常生活で直面する困難である。具体的には,「コミュニケーション」,「就労状況」,「子育てと家庭との両立」,「日本の文化理解」である。

メゾレベルの視点とは，彼らの生活上の困難に関わる，フォーマル・インフォーマルな支援の詳細である。具体的には,「地域社会における支援者」,「保育･学校教育」,「地域の社会資源の利用」「自治体の制度・サービスへのアクセシビリティ」である。

また，マクロレベルの視点とは，彼らの生活上の困難に直接的な影響を与えるものではないが,「ニューカマーとしての労働者の法的位置づけ」「在留資格」「国・自治体における法制度」である。

本稿の知見により，地域福祉の分野において，地域包摂社会を構想する上での具体的かつ体系的な視点を提供することができると考えられる。

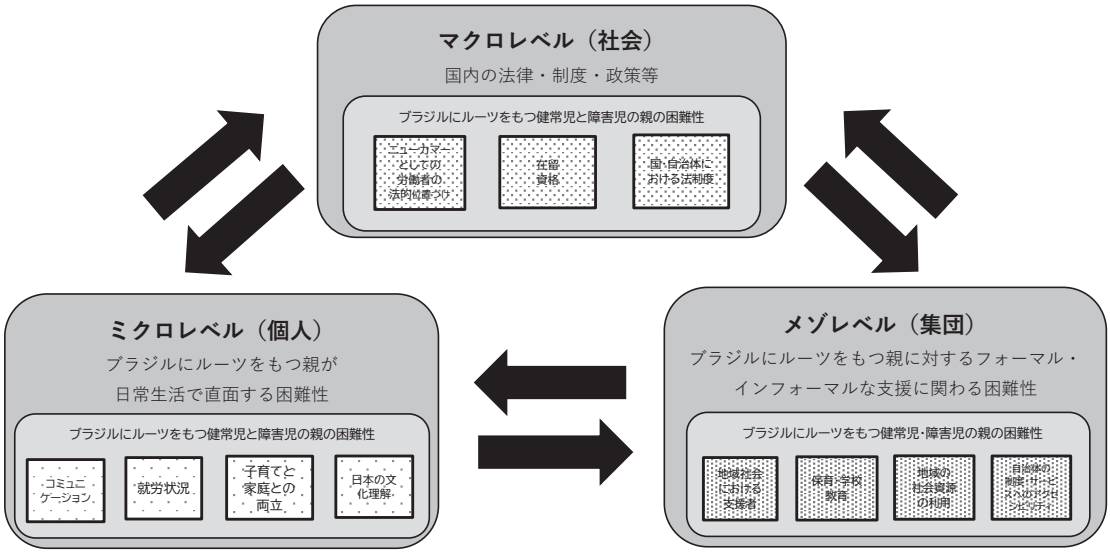

図１　ブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親の困難の分析的視点　筆者作成

３．調査の概要

３－１．対象者と選定理由

調査対象者は，Ａ県在住のブラジルにルーツをもつ健常児の母親５名と障害児の母親２名である（表１，表２）。ブラジルにルーツをもつ親は，その多くが日系人であり，居住や就労においての制約が，在留資格上ほとんどない。しかし，実際には上記で指摘した５点にみられるように，日本人との明確な格差が存在し，そのことが彼らの生活上の困難性につながっている。さらに，健常児の親と，障害児の親の困難性の相違点に着眼するため，ブラジルにルーツをもつ健常児の親をインタビュー調査の対象とした。

なお，対象者のデータの内容はインタビュー調査当時のものである。

３－２．調査方法

本稿では，Ａ県に在住するブラジルにルーツをもつ健常児の親と，きょうだいに障害児のいる親へのインタビュー調査を行った。スノーボール方式による調査協力者を募集し，参加に同意した親に対し，半構造化面接法によるインタビュー調査を行った。調査時期は，調査協力者の都合の良い2021年12月～2022年４月の期間のうち，概ね２時間～２時間半にわたりインタビュー調査を行った。

質問紙については，菱田（2021;2022）に準じ，言語・教育・家族・貧困・インフォーマルな支援・フォーマルな支援・親のねがい・親自身の人生という観点から先行研究（藤原 2013;2015，田中 2015，三井 2013，山岡 2007，藤本・黒田 1999）をもとに作成した質問項目を用いた（表３）。

インタビューは，対面形式もしくはオンラインで実施した。筆者とポルトガル語の通訳者が同席し，オンラインの場合はパソコンやスマートフォンの画面を通して面接を行った。基本的属性についての聞き取りの後，来日当時から現在に至る体験について，時系列に沿って尋ねた。その後，質問項目に沿って，対象者に自由に答えてもらった。子どもを出産した時点での居住国や，来日前・後の出産については特に区別せずに，来日後の子どもの出産から育児に至るまでの様子をインタビューした。

音声データは，母国語での回答を通訳者が翻訳し，テキストデータ化したものを使用した。インタビューデータの処理方法としては，以下の手順を踏んだ。まず，テキストデータの内容を精査し，ブラジルに

表１　インタビュー対象者の一覧：ブラジルにルーツをもつ健常児の親

氏名	年齢・性別	インタビュー日時	インタビュー方法	出身国	居住地	日本居住年数	日本語の習得状況	在留資格	世帯の家族構成	お子さんについて
Bさん	30代・女性	2021.12.16	対面	ブラジル	A県	約20年	日本語は理解できるが，話すことは難しい	永住者	本人･夫･長女（10歳）・次女（８歳）	健常児
Cさん	50代・女性	2022.2.6	オンライン	ブラジル	A県	約30年	日常会話は問題ない ひらがな，カタカナは書くことができる	永住者	本人・長男（22歳）・長女（18歳）	健常児
Dさん	40代・女性	2022.2.20	オンライン	ブラジル	A県	約25年	聞くのは大体わかる 話すのが難しい	定住者 永住ビザ申請予定	本人･長男（12歳）	健常児
Eさん	40代・女性	2022.2.2	オンライン	ブラジル	A県	約７年	聞くのは大体わかる 話すのが難しい	定住者	本人･夫･長女（14歳）・次女（９歳）	健常児
Fさん	40代・女性	2022.4.11	対面	ブラジル	A県	約25年	聞くのは大体わかる 話すのが難しい	永住者の配偶者等	本人･夫･長女（18歳）・長男（９歳）	長男が低出生体重児（現在は問題なし）

表２　インタビュー対象者の一覧：ブラジルにルーツをもつ障害児の親

氏名	年齢・性別	インタビュー日時	インタビュー方法	出身国	居住地	日本居住年数	日本語の習得状況	在留資格	世帯の家族構成	お子さんについて
Gさん	30代・女性	2021.12.11	対面	ブラジル	A県	約30年	日常生活には困らない カタカナ，ひらがなは読めるが，漢字は読めない	永住者	本人･夫･長男（15歳）・次男（４歳）	長男が自閉症
Hさん	20代・女性	2021.12.22	対面	ブラジル	A県	約６年	聞いて少しわかるが，話すのが難しい	永住者の配偶者等	本人･夫･長女（12歳）・長男（４歳）	長男が先天性障害

ルーツをもつ健常児の親と，障害児の親に共通する困難性と，障害児の親に特徴的な困難性を図１の分析的枠組に従ってミクロ，メゾ，マクロレベルに関する各困難性の下位カテゴリーに分類した。ブラジルにルーツをもつ障害児の親に固有の困難性についても，上記と同様の手続きに従い分類した。

３－３．倫理的配慮

インタビュー調査の協力依頼を行う際には，事前に研究目的と調査の概要，個人情報の取り扱い，調査協力者の権利などについて書面にて説明を行い，書面で同意を得た。書面の表記については，多文化共生における情報アクセシビリティの観点から，「やさしい日本語」に準じた。また，対象者の日本語話力に応じて，対象者と同じ文化圏出身のキーパーソンに通訳を依頼し，研究の説明・協力依頼後，同意を得たうえでインタビューを実施した。

なお，本調査実施に先立ち，立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号：衣笠-人-2021-53）。

４．調査結果―ミクロ，メゾ，マクロレベルにおけるブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親の困難性

ブラジルにルーツをもつ健常児の親と障害児の親

表３　インタビューでの質問項目とその詳細（菱田 2021；2022）

質問内容	具体的な質問項目	
基本属性	氏名・年齢・居住地・連絡先・出身国・国籍・在留資格・居住年数・家族構成・お子さんの障害名※・手帳の有無※・利用している社会福祉制度※・日本語の習得状況・経済状況	
日本での生活を始めてから現在までの様子	・来日した理由 ・周産期の生活の様子 ・育児での苦労	・来日時の苦労 ・お子さんの障害が明らかになった時の様子※ ・日本人家庭と比べて不満に感じること
家庭での子育ての様子	・一番世話をしているのはだれか ・言葉（母語・日本語）について	・子育てで自分にしかできないこと ・教育について
子育てにおける環境	・文化について ・安心できる場所や人の存在	・必要なサービスや制度 ・相談できる場所や人の存在
親自身のねがい	・親自身のねがい ・親自身の目標	・親自身の余暇について ・お子さんの将来について

※障害児の親のみの質問事項

に共通する困難性（表4-1，表5-1，表６）と，障害児の親に固有の困難性（表4-2，表5-2）について整理した。さらに，整理された健常児・障害児の親の困難に関するミクロ・メゾ・マクロ視点の各カテゴリーを，図１の分析的枠組みに盛り込み，図２，図３に反映させた。以下，ブラジルにルーツをもつ健常児の親と障害児の親における困難性について，それぞれ述べていく（以下，「」は，本人の語り，()は筆者補足，…は省略の意味で用いた)。

４－１．ミクロレベルにおける親の困難性の詳細

ミクロレベルにおける親の困難性については，①日本語コミュニケーションの困難性，②家計に関する困難性，③仕事と子育ての両立の困難性，④文化理解の困難性の，大きく４つについて語られた（表4-1)。

第１に，日本語コミュニケーションの困難性についてである。日常生活において直面する日本語を話す・聞く・書くことの困難性が語られた。

「(日本語の)理解はできるが,話すことは難しい。日本人と働いているけど，コミュニケーションはとれる。難しい言葉はできない」(B さん)
「聞くのは大体わかる。話すのが難しい」(D さん)

彼らが居住する地域社会には,日本語教室など,日本語を習得する環境がある。しかし，日本語教室へは就労や子育てなどによって通うことが出来ず，日本語能力が向上しないまま滞在年数が長くなった様子が語られた。

「３年くらい，有料で訪問して，個人レッスンで教えてくれる人がいた。でも仕事がきついのでやめた」(B さん)
「仕事していると８時から20時まで仕事なので,勉強する時間がない…本はいっぱいあるけど，勉強する時間がない。仕事するか，勉強するか。勉強するとお金が足りない。日曜日だけ時間があるが，買い物,家事,育児のこと（を）しないといけない」「30年日本に住んでいるけど言葉，日本語が言えないから恥ずかしい。30年だったらもっと話せるはずだったけど。仕事してすごい疲れて帰ってきて,(勉強しようとしても）頭に入ってこない」(C さん)
「16歳で日本に来て，勉強する時間がなくて，すぐ会社に入った。後悔している。勉強しなくて」(D さん)
「やっぱり一番難しいところは日本語を勉強する機会が欲しかった…（日本語教室の）情報は入ってくるけど行けなかった」(F さん)
「日本語教室に何回か行ったが,自分の仕事の時間がハードだったからやめちゃった。子どもが生まれたときに,（日本語教室の）勉強始まったけど，できなかった」(H さん)

このように，複数の親が日本語の学習を希望しながらも，就労後に，日本語学習を行うことに対して心身・時間・金銭の面で困難を感じていた。親の日本語コミュニケーション能力は,派遣元や雇用主,国や自治体や政府によって制度として保障されるものではなく，就労以外の時間を使っての自助努力やインフォーマルな支援という形で向上する状況となっている。

第２に，家計に関する困難性である。不安定な就労や，子育てや日本語通訳に伴う金銭的困難について語られた。

「子どもが小さいときは,(ブラジル人経営の託児に)子どもを預けるのもお金がかかった」(C さん)
「上の兄が気管支炎が大変でよく入院してた…その時は通訳代がすごいかかって大変だった」(C さん)
「2008年にリーマンショックがあって…５年くらいはとてもつらかった。その時はあまり仕事できず,パートタイムでしか仕事できず，住宅の援助があって,それをもらって，なんとか生活できた」(D さん)
「(子どもが）６か月の時にその後ブラジルの保育所に預けた。子どもが小さいときは，子どもを預ける

表 4-1　ブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親のミクロレベルにおける困難性

	カテゴリー		具体的内容	発言者
ミクロレベルに関する健常児および障害児の親の困難性	①コミュニケーションの困難性	日本語を話す・聞く・書く	理解はできるが，話すことは難しい。日本人と働いているけど，コミュニケーションはとれる。難しい言葉はできない	B さん
			今は日本語の通訳が入るので，上司が私たちに話をしなくなった。昔は通訳いないときは，声をかけてくれたから日本語をおぼえられたけど，年齢が進んでいくけどおぼえていけない	C さん
			聞くのは大体わかる。話すのが難しい	D さん
			話すことは理解できるが，自分から話すことは難しい。日本語が早口に聞こえてパニックになっちゃう。何か早く返事しないと，と思うと何も（言葉が）出なくなる	F さん
		日本語学習機会の逸失	３年くらい，有料で訪問して，個人レッスンで教えてくれる人がいた。でも仕事がきついのでやめた	B さん
			仕事していると８時から20時まで仕事なので，勉強する時間がない…本はいっぱいあるけど，勉強する時間がない。仕事するか，勉強するか。勉強するとお金が足りない。日曜日だけ時間があるが，買い物，家事，育児のことしないといけない 30年日本に住んでいるけど言葉，日本語が言えないから恥ずかしい。30年だったらもっと話せるはずだったけど。仕事してすごい疲れて帰ってきて，頭に入ってこない	C さん
			16歳で日本に来て，勉強する時間がなくて，すぐ会社に入った。後悔している。勉強しなくて	D さん
			やっぱり一番難しいところは日本語を勉強する機会が欲しかった。…（日本語教室の）情報は入ってくるけど行けなかった	F さん
			日本語の通訳が入るので，上司が私たちに話をしなくなった…（自分たちの）年齢が進んでいくけど覚えていけない	G さん
			日本語教室に何回か行ったが，自分の仕事の時間がハードだったからやめちゃった。子どもが生まれたときに，（日本語教室の）勉強始まったけど，できなかった	H さん
	②家計に関する困難性	通訳代の金銭的負担	上の兄が気管支炎が大変でよく入院してた。ぜんそくまでではないけど。その時は通訳代がすごいかかって大変だった	C さん
			大変なのは，病院（の治療費）より通訳代がかかること	H さん
		経済的困難	レストラン行けない。高いお肉買えない…野菜も高い。夏は友達から野菜をもらって，助かっている	C さん
			（子どもが）６か月の時にその後ブラジルの保育所に預けた。子どもが小さいときは，（ブラジル人経営の託児に）子どもを預けるのもお金がかかった。	
			上の兄が気管支炎が大変でよく入院してた…その時は通訳代がすごいかかって大変だった	
			2008年にリーマンショックがあって…５年くらいはとてもつらかった。その時はあまり仕事できず，パートタイムでしか仕事できず，住宅の援助があって，それをもらって，なんとか生活できた	D さん
			（以前は）本当に難しいときは自分たちでお金払って通訳を雇っていた。	F さん
			弟は７か月で生まれたので，医療費もかかって，経済面で大変だった。病院とか市役所とかで医療費が大変だった	
			（病院での）通訳をお金を払ってお願いしていた	G さん
			１歳の時（弟が）手術した時に，…（一緒に）病院に入院した。20日間と入院した。夫が仕事して，時間給だからその時給料がダウンした （新型コロナウィルスの影響で夫の仕事が）結構減った。定時で残業代も出ず，（勤務日が）休日になることもあった）	H さん
			大変なのは，病院（の治療費）より通訳代がかかること	
	③仕事と子育ての両立の困難性	就労と家庭との両立	工場で基盤を作る仕事。１週間昼勤，１週間夜勤。日曜日だけ休み…夜勤の仕事があった時は，おかしくなる。ぼーっとする	C さん
			派遣会社は有休も，産休，育休もなかった	
			２つの会社で働いている。８時から19時まで働いて，19時半から22時まで（別の職場で）働いている。お金を貯めている	D さん
			夏休みは仕事をやめて子どもと過ごしていた。１つの仕事だけ（休むことを）認めてもらえなくて，休み中も働かないといけなかった	E さん
			派遣会社が社会保険に入れてくれなかった。自分でお願いして，出産前に３か月だけ入れてくれた。３か月前に保険入って，産休育休の手当てももらえなかった	H さん
			夫が働いている会社は，学校行事で休むことが許されない。発表会とは，夫婦で参加することが多い。日本の生活では，夫の負担が大きい	
			外国とか母国とか国内旅行とかあきらめた。お金がかかる。	G さん
		親と子どものコミュニケーションに関する母語と日本語	上の子は結構日本語覚えて，自分にも友達にも通訳をしてくれる。銀行とか，入管とかでも通訳してくれる。嫌がるときがある。そういう時困る	E さん
			家では，夫は日本語は喋って，夫婦ではポルトガル語。子どもと母とはポルトガル語。兄弟同士は日本語	F さん
			自分はチャンスがなかったけど。子ども達はチャンスがあるから頑張ってほしい。ポルトガル語も忘れないでほしい。忘れないで（ポルトガル語も）分かれば，もう一個（回）チャンスがあるから	
		進学に関する情報・経済的不安	高校卒業してこれからのことが心配。お金がどれくらいかかるか知識がないので，暗闇の中にいるという感じ	F さん
			子どもが大学行きたいと言っても，６年まだあるし，貯金して準備している	D さん
	④日本の文化理解に関する困難性	日本の文化理解に関する困難	（日本の）食事の匂い。食べられなかった	B さん
			子どもが，ブラジルのごはんが食べたくなって，（給食では）みそ汁とご飯だけ食べてた…長女が日本の文化を母に話すが，自分が分からない	C さん
			日本の文化，食べ物についてもうちょっと説明しないといけない	E さん
			日本の文化が全然わからないから。いろいろ子どものことで参加するが全然わからない	H さん

のもお金がかかった」（D さん）
「（以前は）本当に難しいときは自分たちでお金払って通訳を雇っていた」「弟は７か月で生まれたので，医療費もかかって，経済面で大変だった。病院とか市役所とかで医療費が大変だった」（F さん）
「（病院での）通訳をお金を払ってお願いしていた」（G さん）
「大変なのは，病院（の治療費）より通訳代がかかること」（H さん）

上記から，不安定な就労に加え，託児代や，医療機関に受診した時にかかる通訳代の負担のほか，子どもへの医療費などによって，家計が困難に陥りやすい状況が語られた。

第３に，仕事と家庭との両立に関する困難性である。長時間労働や昼夜交代制勤務などにより，心身に大きな負担がかかっているとともに，子育てにかかわる理由で休暇が取りにくい状況等が語られた。

「工場で基盤を作る仕事。一週間昼勤，一週間夜勤。日曜日だけ休み…夜勤の仕事があった時は，おかしくなる。ぼーっとする」「派遣会社は有休も，産休，育休もなかった」（C さん）
「夏休みは仕事をやめて子どもと過ごしていた。１つの仕事だけ（休むことを）認めてもらえなくて，休み中も働かないといけなかった」（E さん）
「夫が働いている会社は，学校行事で休むことが許されない」「前は夜勤をしていた。出産５日前までも仕事していた。派遣会社が社会保険に入れてくれなかった。自分でお願いして，出産前に３か月前（間）だけ入れてくれた。３か月前に保険（に）入って，産休育休の手当てももらえなかった。退職願い（を出）して，雇用保険に申請した（筆者注：雇用保険には加入していたが，会社の健康保険や厚生年期保険などには加入していなかったため，退職の３か月前に加入したと考えられる）」（H さん）

上記の発言から，ブラジルにルーツをもつ親の多くは，非正規雇用での就労が多いことが分かる。そのため，本来労働基準法で一定の基準を満たせば認められている産休・育休制度が，日本人の非正規雇用者と同様に，取得しづらい状況があった。結果的に，親には，妊娠，出産，就園・就学など，自身のライフサイクル上の大きな契機に伴う勤務体制を変更・調整できるような裁量がほとんどなく，仕事と子育てを両立することが非常に困難となっている。

第４に，親の日本の文化への理解についての困難性である。親は，日本語だけではなく，日本の慣習やルールなど，日本の文化についても困難を感じていた。

「上の子は結構日本語（を）覚えて，自分にも友達にも通訳をしてくれる。銀行とか，入管とかでも通訳してくれる。嫌がるときがある。そういう時困る」（E さん）
「家では，夫は日本語は（を）喋って，夫婦ではポルトガル語。子どもと母とはポルトガル語。兄弟同士は日本語」（F さん）
「日本の文化が全然わからないから。いろいろ子どものことで参加するが全然わからない」（H さん）

親が子育てで求められる日本の文化に基づいた行動に，戸惑っている様子が語られた。一方で，彼らの子どもは，日本で教育を受け，日本語と日本文化を学び，場合によっては親の通訳を担っている。そのことが子どもへの負担となり，親子関係に負の影響を与えていた。以上から，ミクロレベルからブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の共通する困難性について考察した場合，ブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親は，日本語コミュニケーションの困難性や就労条件の厳しさによって，心身への負担に加え，子どもの養育に関わる追加の負担という，日本人の親とは異なる子育て上の困難性が見られた。ブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親が日常生活において直面する困難性は，親自身の日本語コミュニケーション，就労，家計，子

どもの受診による経済的負担など，複数の要因が重層しているといえる。

一方，ブラジルにルーツをもつ障害児の親の固有のミクロレベルにおける困難性については，①子どもの障害理解に対する困難性，②子どものケアと将来に関する困難性の２点が見出された（表4-2）。

第１に，親の子どもの障害特性に対する理解である。前項でも言及したが，親の日本語習得が不十分なために，子どもの障害についての理解がなかなか進まなかった。さらに，医療関係者に相談することができず，不安を抱えたまま長期間過ごしている様子が見られた。

「AUTISMと言われてポルトガル（語）と一緒で，インターネットで探して。新しい言葉だから，ドクターの言葉も脳のことだから，ほかの言葉で話すことはもっと難しくなるから。細かいことはもっと難しくなるから，インターネットで調べて，原因とか調べた。11歳で日本来たから自閉症[5]（ASD）ということは知らない。身の周りにもいないから。ポルトガル語で聞いてもわからない。自分の自閉症（ASD）の考えは歩けない子どもというイメージ。手足がマヒしているようなイメージ。ポルトガル語で自閉症（ASD）を調べて，日本語の言葉も覚えて。ドクターも，自分（親）が分からないと思ったら通訳連れてきて，と（言われた）」（Gさん）

「子どものことをはじめから分かっていて，いろいろ聞きたかったけど（日本語が）わからなくて，診断が下りたから治療の方針が分かって安心した」（Hさん）

Gさんは，子どもが自閉症（ASD）であるという医療機関での診断結果について，その障害の内容を母国語で必死に調べ，医師から説明される内容を日本語でも理解しようと奮闘する様子を語った。医療機関側も必要に応じて通訳を介すことを母親に求め，内容がなるべく親に正確に伝わるような方法を要請していた様子が窺われる。しかし，Hさんは，日本語が不自由なことで子どもの障害に関する不明な点を十分に質問できず，不安を解消できないままであった。

一方，診断が確定し，その障害の詳細や治療方針がHさんにも理解できたことで，Hさん自身の不安が解消された様子が語られた。

第２に，子どものケアと将来に関する困難性である。障害児へのケアに関する親の心身の負担や，ケアに忙殺される様子，また親亡き後の子どもの生活についての不安が語られた。

「（周囲から）子どもを見られるからリラックスできない」「当時３時間だけしか寝なくて，その後バッテリー100％で全然眠くならない。家族は眠くて，昼間少し運転中に眠くなって，信号待ちで少し寝てしまって，起きてびっくりして。事故してはなかったけど」（Gさん）

また，子どもへのケアのために，当初の予定に反し日本での定住が長期的になったことや，母親自身が望むような就労形態によって十分にお金を稼ぐことが出来ないことによる経済的な不安，医療機関への金銭的負担が増えることに関する葛藤が語られた。

「自分はもうちょっとフルタイムで働きたかった。もうちょっとお金が欲しかったから。長男の自閉症（ASD）で療育施設が保育園みたいなところだったけど，９時から15時まで（親が）一緒にいないといけなかったから，働くの無理だった」（Gさん）

Gさんは，子どもが将来住む場所に困らないようにと，戸建ての家を購入した。Gさんが日本で家を建てたことには，障害のある子どもが日本で今後も暮らし続けるための居場所を確保するという意味が込められている。

４－２．メゾレベルにおける親の困難性の詳細

メゾレベルに関するブラジルにルーツをもつ親に

表４-２　ブラジルにルーツをもつ障害児の親に固有のミクロレベルにおける困難性

	中カテゴリー	小カテゴリー	具体的内容	発言者
ミクロレベルに関する障害児の親の困難性	①子どもの障害理解に対する困難性	子どもの障害を理解・説明するための日本語の困難	保育器に入っているの見てびっくり。心臓がドキドキ。…「息しているか？」と聞きたかったけど，会社の言葉ではないから，いろいろ新しく覚えないといけない	G さん
			ガンとかは MRI とかレントゲン撮って見える。自閉症は見えない。だから大変だった。自閉症とわかるまで大変だった。そのことを理解するまで大変 だった	
			AUTISM と言われてポルトガル語と一緒でインターネットで探して。新しい言葉だから，ドクターの言葉も脳のことだから，ほかの言葉で話すことはもっと難しくなるから。細かいことはもっと難しくなるから，インターネットで調べて，原因とか調べた。11歳で日本来たから自閉症ということは知らない。身の周りにもいないから。ポルトガル語で聞いてもわからない。自分の自閉症の考えは歩けない子どもというイメージ。手足がマヒしているようなイメージ。ポルトガル語で自閉症を調べて，日本語の言葉も覚えて。ドクターも，自分（親）が分からないと思ったら通訳連れてきて，と（言われた）	
			翻訳アプリも結構間違っていることが多い。翻訳機を使ったことがあるが，ドクターもあまり役に立たないから受けてくれない。通訳を嫌がるドクターもいる	H さん
			自分が（子どもが）普通ではないとわかったから。体の一部が普通の状態ではなく，ドクターに言ったがドクターは気づかなかった。自分が気づいたけど，自分で説明できなくて困った。子どものことをはじめから分かっていて，いろいろ聞きたかったけど（日本語が）わからなくて，診断が下りたから治療の方針が分かって安心した	
	②子どものケアと将来に関する困難性	子どものケアによる親の心身の負担	（周囲から）子どもを見られるからリラックスできない	G さん
			当時，（子どもが）３時間だけしか寝なくて，その後バッテリー100％で全然眠くならない。家族は眠くて，昼間少し運転中に眠くなって，信号待ちで少し寝てしまって，起きてびっくりして。事故してはなかったけど	
		子どものケアによる就労の制限	自分はもうちょっとフルタイムで働きたかった。もうちょっとお金が欲しかったから。長男の自閉症で療育施設が保育園みたいなところだったけど，９時から15時まで（親が）一緒にいないといけなかったから，働くの無理だった	G さん
			出産後すぐに働く予定だったが，子どものことで仕事ができなかった…本当は，お金貯めて帰るつもりが，弟が生まれて予定が変わった	H さん
			１歳の時（弟が）手術した時に，（一緒に）病院に入院した。20日間入院した。夫が仕事して，時間給だからその時給料がダウンした	
		親亡き後の子どもの生活	家を建てたのは，長男が障害があり，弟は健常。自分たちは亡くなっても，弟に長男のことをお願いしたい。それは弟には重い。家があれば，家賃を払わなくていいので，少し楽	G さん

固有の困難性は，①地域の社会資源における日本語対応の困難性，②日本人との心理的障壁，③自治体の制度・サービスへのアクセスの困難性，④家族・同胞によるインフォーマルな支援・共助，⑤保育・教育体制に対する困難性の５点である（表5-1）。

第１に，地域の社会資源における日本語対応の困難性である。

「（病院の通院は）難しいことがあるときには通訳を連れて行ったりしていた。あとは自分たちでやっていた。大きい病院には通訳がいたが，クリニックには通訳がいなかった」（B さん）

「（出産した子どもが）保育器に入っているの（を）見てびっくり（した）…「息しているか？」と聞きたかったけど，会社（で使う日本語）の言葉ではないから，いろいろ新しく覚えないといけない」（G さん）

「（通院時）通訳頼めなくていっしょに行けないとき。いろんな人に電話して一緒に来てくれる人を探した」（H さん）

「日本のいろんな制度とか，書類とか通訳とか。ずーっと日本語で困っている。保育士の先生とのやり取りで困った」（F さん）

「保育園で，自分が聞かれたことを返事しないといけないとき（大変）」（H さん）

1990年代初頭から30年あまりが経ち，多くのニューカマーが日本の地域社会で生活している。しかし，彼らの生活に密接に関わる教育，医療，子育て支援に関わる社会資源が，地域における様々な背景を持った人々に十分に対応できていない状況が窺える。

第２に，日本人との心理的障壁である。地域社会で生活を送る中で向けられる，一部の日本人からのまなざしに，困惑している様子が語られた。

「スーパーに行っても，（日本人の）昔の年長者はずーっと自分のことを見ている。まだ壁がある…日本人で話しやすい人いるけど，別の日本人はブラジル

表 5-1　ブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親のメゾレベルにおける困難性

	中カテゴリー	小カテゴリー	具体的内容	発言者
メゾレベルに関する健常児および障害児の親の困難性	①地域の社会資源における日本語対応の困難性	医療機関での日本語コミュニケーション	(病院の通院で)難しいことがあるときには，通訳を連れて行ったりしていた。あとは自分たちでやっていた。大きい病院（市民病院)には通訳がいたが，クリニックには通訳がいなかった	B さん
			妊娠しているとき，一人で通院していた。「やさしい日本語で話して」と頼んでいた	C さん
			小さく生まれて月一回通院があったが，夫に行ってもらったり，通訳を頼んだりしてなんとか乗り越えてきた。弟は今は後遺症も残らず健康	F さん
			通訳頼めなくていっしょに行けないとき。いろんな人に電話して一緒に来てくれる人を探した	H さん
		園との日本語コミュニケーション	日本のいろんな制度とか，書類とか通訳とか。ずーっと日本語で困っている。保育士の先生とのやり取りで困った	F さん
			保育園で，自分が聞かれたことを返事しないといけないとき（大変）	H さん
	②自治体の制度・サービスへのアクセスの困難性	自治体による支援の差	病院の書類など初めて見るものとか，母子手帳取るときとかは，全部（近隣の)市役所にもっていって，通訳の人に手伝ってもらった。その時は違う町に住んでいたけど，その役場には通訳がいなかったので…教えてもらって持って行っていた (近隣の)市役所の通訳の二人がすごく優しくて教えてくれた。よくわからないけど，自分に対して，市外在住だけど手伝ってくれた	B さん
			市役所の手紙が全部日本語。同じものはわかるけど，わからないときはゴミ箱に入るか，市役所に電話（する）	E さん
		子育て支援制度へのアクセシビリティの困難	別のオプションがないから，自分が強くなって頑張るしかないなって	D さん
			(子育て支援制度を)利用したことはないです	F さん
			(子育て支援施設について)知らない。忙しいし。行きたいけど，仕事で時間がない	H さん
	③家族・同胞によるインフォーマルな支援・共助	家族によるインフォーマルな支援・共助	(他のブラジル人の子育て家庭が周囲に)いるけど，同じ年くらいの家族とは関わりがあるが，上の年代の家族とはあまり関わりがない。同い年の保護者の友達はいるが	B さん
			妊娠するまでは，仕事とうちの往復，(子どもの)学校ということがなかったから，特に（日本語には)困らなかった	F さん
			夫の祖母がブラジルから来てくれて，面倒見てくれてた	C さん
			親戚が（の)日本語が分かる人にかなり手伝ってもらった	F さん
			母はブラジルに帰国して，父は県外で金銭的援助だけしかできない。兄も県外。だから夫しかいない	G さん
		同胞によるインフォーマルな支援・共助	６か月の時から４歳までブラジル人の託児所に預けた…その後，託児所の人は愛知県に引っ越してなくなってしまった。それで，その子ども達を自分で預かった。(日本の保育園に)受け入れられる４月まで。ブラジル人の託児所を閉めたとき，自分が６人の子どもを預かって，面倒見ていた。３人赤ちゃんがいて，ほかの親を助けるために見ていた。大変だった。そのとき，託児所が閉まって，親が仕事を辞めないといけなかったので，自分が面倒見ることで親からお金をもらって，それで生活できていた	D さん
			いろいろ経験している。苦労している人をみると，助けたくなる	
			コロナになったときに，いろいろな人が食料を届けてくれた	
			ブラジル人の友達が２人いる。なんでも話ができる。日本来た時に，助けてくれたのはそのうちの１人。残業の時お互い助け合いをしていた。相手の子どもが骨折した時，病院連れて行ったり	E さん
			妊娠した時に病院に健診とか行かないといけないから，その時も今も通訳が必要。通訳がずっと面倒見てくれた。妊娠，出産，現在まで	H さん
	④日本人との心理的障壁	日本人からのまなざし	スーパーに行っても，(日本人の)昔の年長者はずーっと自分のことを見ている。まだ壁がある 日本人で話しやすい人いるけど，別の日本人はブラジル人は怖いみたい	C さん
		日本人保護者との距離	PTA は80％くらいは日本人なので，保護者との壁がある	F さん
	⑤保育・教育体制に対する困難性	保育園の慣習・ルールに対する不安	保育園に子どもたちが行く時に，保育園とか学校に行く時に，どういう風にしたらいいかわからないから，(事前に)何を食べるとか，そういうインフォメーションがあったら，行くまでに子どもが（を)家で慣れさせることができる	E さん
		保育園での心的外傷体験	園の時，先生から長女にいじめがあった。それがあって，今でも小児科で心理的な治療に通っている	B さん
		保育士の子どもへの対応	保育園の時，とてもつらかった。日本語わからなくて。そのとき保育園の先生から（子どもが)いじめられた。先生が子どもを引っ張ったりしていた	D さん
		教員との共通理解の困難さ	小学校に通訳がいるとしても，すべてわかるわけではない。わからないこともある。それぞれ先生も特徴があって，それぞれの担任の先生のシステムがあって，担任によってはわかりづらいシステムもある。先生のやり方がぞれぞれ違うので	F さん
			担任と親との間に壁がある感じがある。引いている感じがある。経験のある先生は，そういうの（壁)がない	
		小学校から中学校への移行	小学校はなんとなくあまり点数にこだわらず，中学に入ったとたんに成績が問題になって，すごくプレッシャーになる。小学校から中学校への違いがすごく大きい	

人は怖いみたい」（C さん）

「PTA は80％くらいは日本人なので，保護者との壁がある」（F さん）

上記の発言からは，ブラジルにルーツをもつ親は，日常生活の何気ない場面における一部の日本人の否定的な反応によって，自らが地域社会や日本人の集

団にとって異質な存在であると感じる経験を積み重ねていることが推察される。

第３に，自治体の制度・サービスへのアクセスの困難性である。親は，子育てに必要な妊娠・出産・子育てなどの情報にアクセスしづらい状況について語った。

「病院の書類など初めて見るものとか，母子手帳（を）取るときとかは，全部（近隣の）市役所に持って行って，通訳の人に手伝ってもらった。その時は違う町に住んでいたけど，その（町）役場には通訳がいなかったので…教えてもらって持って行っていた」
「（近隣の）市役所の通訳の二人がすごく優しくて教えてくれた。よくわからないけど，自分に対して，市外在住だけど手伝ってくれた」（B さん）
「市役所の手紙が全部日本語。同じものはわかるけど，わからないときはゴミ箱に入（れ）るか，市役所に電話（する）」（E さん）

子育て中の親に対する制度やサービスへのアクセシビリティを高めるためには，自治体がそれらの情報を，やさしい日本語もしくは親の母語を含む多言語で発信することが必要となる。また，単なる翻訳に留まるのではなく，制度自体の説明や，利用における様々な注意事項を理解してもらう事も必要となってくる。このような対応は，自治体の裁量によるものである。そのため，親の居住する自治体によって，情報アクセシビリティに差が生じている。そして，親が自治体の窓口や医療機関において直面する情報アクセシビリティの困難性は，本来利用可能なはずの制度やサービスの利用の機会を逸失させやすくする。

「別のオプションがないから，自分が強くなって頑張るしかないなって」（D さん）
「（子育て支援制度を）利用したことはないです」（F さん）
「（子育て支援施設について）知らない。忙しいし。行きたいけど，仕事で時間がない」（H さん）

日本に住む者は，その国籍や居住地を問わず，最低限の生活の質が保障されるための，情報へのアクセシビリティが確保される必要がある。しかし，国がそのような環境を整備するための積極的な推進策を整備していない。そのため，各自治体が国際人権 A 規約に基づき，日本人と同様に制度やサービスが使えるよう可能な限り努力している。しかし，自治体の取組みの状況や，親自身の生活状況等などによって，困難感を緩和するような制度へのアクセシビリティが妨げられている。そのことは，結果的に親の子育てに対する自己責任感を強めることになり，彼らの心身に大きな負担を強いることにつながっているといえよう。

第４に，家族･同胞によるインフォーマルな支援･共助である。親の子育てにかかわる様々な困難性は，家族や同胞からの支援や共助によって支えられていた。

「（他のブラジル人の子育て家庭が周囲に）いるけど，同じ年くらいの家族とは関わりがあるが，上の年代の家族とはあまり関わりがない。同い年の保護者の友達はいるが」（B さん）
「夫の祖母がブラジルから来てくれて面倒見てくれてた」（C さん）
「ブラジル人の託児所を閉めたとき，自分が６人の子どもを預かって面倒見ていた。３人赤ちゃんがいてほかの親を助けるために見ていた。大変だった…そのとき，託児所が閉まって，親が仕事を辞めないといけなかったので，自分が面倒（を）見ることで親からお金をもらってそれで生活できていた」「いろいろ経験している。苦労している人をみると，助けたくなる」（D さん）
「ブラジル人の友達が２人いる。なんでも話ができる。日本（に）来たときに助けてくれたのはそのうちの１人。残業の時お互い助け合いをしていた…相手の子どもが骨折した時，病院連れて行ったり（した）」

表5-2　ブラジルにルーツをもつ障害児の親のメゾレベルにおける困難性

	中カテゴリー	小カテゴリー	具体的内容	発言者
メゾレベルに関する障害児の親の困難性	子どもの発達に関する専門家との共通理解を図る困難性	日本と海外との療育体制の違いによる葛藤	ブラジルやアメリカでは，療育をインテンシブ…週に3回とか…日本はリハビリは月一回…必要な子がいても足りない。何年も成長にかかる…本当にそれで助かりますか	Gさん
		生活単元中心の教育体制への疑問	学校では作業のこととかは教えてくれる。手を洗うとか，生活のことは教えてくれるが，勉強のことは全然教えない。長男はコミュニケーションがないから他の勉強ができないと考えている。何回も学校に言うけど，変わらなかった…畑などの作業のことだけ，勉強のことまではいかなかった	
		子どものケアに関する共通理解	(子どもの特性に対して)学校，家，放デイで同じような対応をしてもらうように伝えること（が難しい）	

「(家では）子どもたちは一人ぼっち。親戚もいないし一人で置いておくのがかわいそうかなって。近所の付き合いがない」(E さん)
「母はブラジルに帰国して，父は県外で（自分達に）金銭的援助だけしかできない。兄も県外。だから夫しかいない」(G さん)
「通訳がずっと面倒見てくれた。妊娠，出産，現在まで」(H さん)

子育て中の親が，家族や同胞に頼ることは，一見当たり前の行為と言えるかもしれない。しかし，外国にルーツをもつ親は，上記で述べた制度やサービスへのアクセシビリティに困難性がある上に，地域社会からのつながりも薄い。それゆえに，家族や同胞に頼らざるを得ない状況に陥っていると言える。原（2013）は，岐阜県における外国籍住民の調査から，外国人家庭が総じて孤立した子育てをしており，子育て仲間がいる家庭のうち，65.5％が同胞の子育て仲間のみであるとしている。

また，原（2013）は，調査した日系ブラジル人の約半数の親は，特に子育てにおける仲間がいない割合が大きいとし，日本人家庭や子育てコミュニティとの関わりが希薄であることを指摘している。

菱田（2022）は，ブラジルにルーツをもつ障害児の親が，周産期から子どもが療育施設に通所するまでの間，母親が地域社会から孤立して生活し，一人で外出することすら困難であったとしている。これらの指摘と同様に，本稿の親の語りから，ブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親と，日常生活や子育てに関する日本人との接点がほとんどないことが明らかとなった。

第5に，保育・教育体制に対する不安である。家族や同胞との関わりが中心である親にとって，子育てを通じた様々なライフサイクル上の出来事は，地域社会とつながる契機となる。しかし，親からは，上記で述べた自治体からの情報アクセシビリティの困難性や地域社会からの孤立に起因した，保育や教育に関する不安が語られた。

次に，障害児の親のメゾレベルにおける困難性についてである。Gさんは，母国やアメリカでの療育の情報を知ったことで，日本の療育体制に疑問や不満を抱えていた。そして，子どもの療育のために，日本を離れ，療育体制の進んだ国に移住して療育を受けるかどうか迷い，逡巡する気持ちを語った(表5-2)。

「ブラジルやアメリカでは，療育をインテンシブ…週に3回とか…日本はリハビリは月一回…必要な子がいても足りない。何年も成長にかかる…本当にそれで助かりますか」(G さん)

なお，筆者は，現状のアメリカの療育体制や，Gさんの地域の療育の実情について確認できていないが，上記の話は，Gさんの居住地域における医療機関の療育やリハビリテーションの実情であると推察される。

また，Gさんの話からは，子どもの障害に関して，親が子どもの潜在的な可能性への期待や発達を願って教育に期待することと，学校教育の方針との間で，十分な共通理解を図れていない状況が窺われた。

「学校ではひらがな，カタカナできなかった。養護学校ではそこまで勉強していなかった。学校でやらな

いとどこでやりますか。私は（学校に）質問しました…学校では作業とかは教えてくれる。生活のことは教えてくれるが，勉強のことは全然教えない。子どもは自閉症（ASD）で，コミュニケーションができないから，他の勉強ができないと考えている」（Gさん）

学校教育においては，教職員が親の願いを受け止め，子どもの全人格的発達を踏まえた関わりをもつ必要性がある一方，親と教職員・支援者との間の日本語コミュニケーションの困難さだけではなく，特別な教育的ニーズに対する支援についての共通理解を図る事の難しさも語られた。

4－3．マクロレベルにおける親の困難性の詳細

マクロレベルに関するブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親の困難性については，在留資格における労働力としての外国人の在り方が，彼らの日常生活に影響を与えていた（表６）。

「日本人と同じ仕事や給料，正社員になりたい。夫は，10年，20年たっても，給料上がらず，ボーナス上がらない。外国人だけど，日本人と同じことしています。前は３年働いたらずっと契約しないといけなかったけど，外国人はそのルール[6)]に該当せず，日本人だけ。ブラジル人悪いことしても日本人と同じ罪。それは寂しい」（Gさん）

ブラジルにルーツをもつ親のほとんどが，就労や居住に制限のない在留資格で来日後，子どもが生まれるなどして家庭を築き，子どもを育てながら日本で長く暮らしている。しかし，彼らの就労における条件は，在留資格によって影響を受け，彼らの努力にもかかわらず，日本人との間に格差が生じている。

目的と背景で触れたように，ブラジルにルーツをもつ親においては，特殊な就労ネットワークによる不安定な雇用環境が，少なからず影響を与えている。

そして，厳しい就労状況は，彼らの心身に大きな負担を強いているとともに，社会資源の有効な利用の機会や，日本での生活の質を向上させる日本語教育等の機会を失わせている。このような，彼らの生活に関する様々な困難の重層性は，結果として彼らを地域社会から孤立させていると言える。

5．考察

本稿の目的は，A県におけるブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親へのインタビュー調査について，両者に共通の困難性を分析し，その上で，障害児の親に固有の困難性と社会的支援における現状と課題を明らかにすることである。上記インタビュー調査の結果からは，マクロ・メゾ・マクロの各レベルにおけるブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親の困難の重層性の実態が明らかとなった（図２，図３）。ここでは，①マクロレベルにおける困難性と，②メゾレベルにおける困難性，③ミク

表６　ブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親のマクロレベルにおける困難性

	中カテゴリー	小カテゴリー	具体的内容	発言者
マクロレベルに関する健常児および障害児の親の困難性	在留資格における労働力としての外国人	労働力としての外国人	日曜日も出勤してほしいと言われたときに，「疲れているから行かない」と言ったら，「あなたたちは仕事しに日本に来ているのではないのか？」と言われた	Cさん
			以前に住んでいたところでの仕事がなくなった。派遣会社から「A県に行きたいか？」と聞かれ，それでA県にきた	Eさん
			払うもの（税金）は日本人と同じなのに。仕事は差がある	Gさん
			正社員になりたい。夫は，10年，20年たっても，給料上がらず，ボーナス上がらない。外国人だけど，日本人と同じことしています 前は３年働いたらずっと契約しないといけなかったけど，外国人はそのルールに該当せず，日本人だけ（契約している）	
		在留資格制度	20年以上日本で暮らしているのに，なんで永住ビザがおりないのかわからない	Dさん
			ビザの更新とか，アプリがあったら必要なものとか，どこで更新できるとか，場所とか書類とか必要なものがわかるといい	Eさん

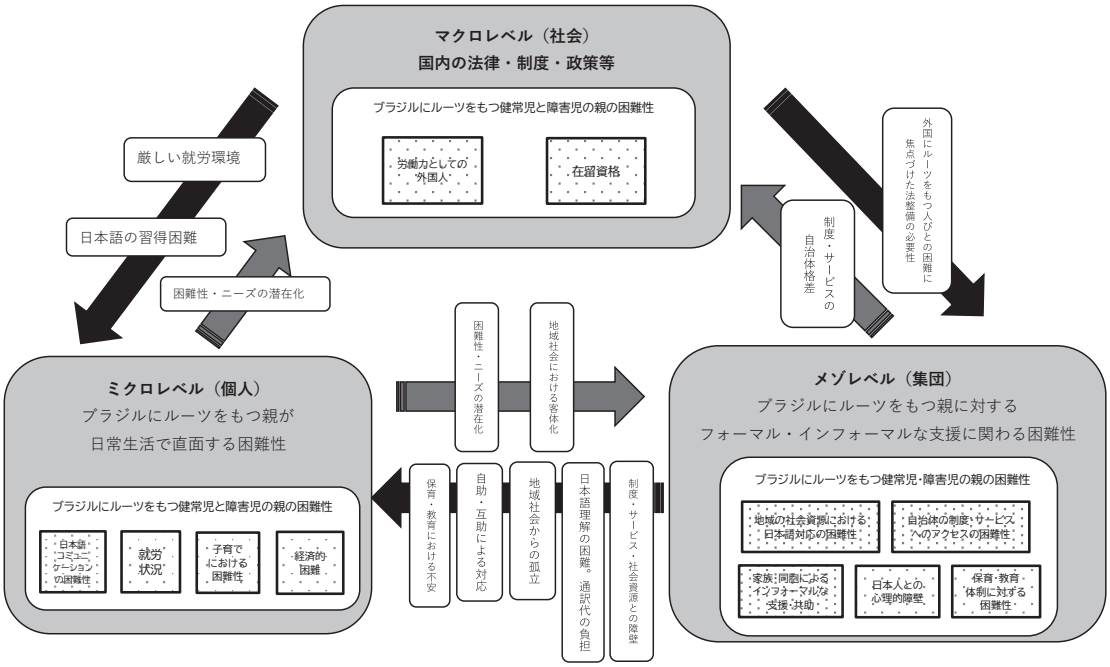

図２　インタビュー調査に基づくブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親の困難の分析的視点　筆者作成

ロレベルにおける困難と，他の２つのレベルにおける困難との相互の影響の実態についてそれぞれ考察したうえで，④ブラジルにルーツをもつ障害児の親に固有の困難性の実態について論じていく。

第１に，マクロレベルにおける困難性と，メゾ・ミクロレベルにおける困難との相互の影響についての実態である。本稿におけるブラジルにルーツをもつ健常児および障害児親の語りから，彼らの厳しい就労環境が，彼らの子育てに負の影響を与えている様子が明らかとなった。国は移民施策を認めていない一方，いわゆる「サイドドア」から，彼らニューカマーを，日本国内での労働者不足を補うため，人材不足である業種に労働力として送り込んできた背景がある。

第２に，メゾレベルにおける社会資源や制度・サービスに関するアクセシビリティや専門性の担保における困難性である。日本が，ブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親へ対応することは，基本的人権の見地から必要な措置である。したがって，日本が彼らを包括的に保障するために，法体系の整備を早急に進める必要がある。しかし，実際には，彼らへの支援の体制整備は自治体の裁量によるものとなっている。その結果，彼らの居住する場所によって，生活における保障されるべき制度・サービスへのアクセシビリティや社会的支援の体制に格差が生じている。

本稿のインタビュー結果は，ブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親が，地域の社会資源を利用する際の日本語の難しさや，自治体の制度・サービスにアクセスする困難が，外国にルーツをもつ健常児および障害児の親の生活の多方面に渡って長期的に支障を与えていることを示している。そして，彼らが，地域社会から孤立しつつ，そこで直面する様々な困難を，家族・同胞によるインフォーマルな支援・共助によって対応している状況が明らかとなった。彼らの困難に対する国や自治体の社会的支援の体制構築には課題がある。

一方，ブラジルにルーツをもつ健常児および障害児に共通の課題として，保育や教育における子どもと保護者の日本語コミュニケーションの困難性を踏

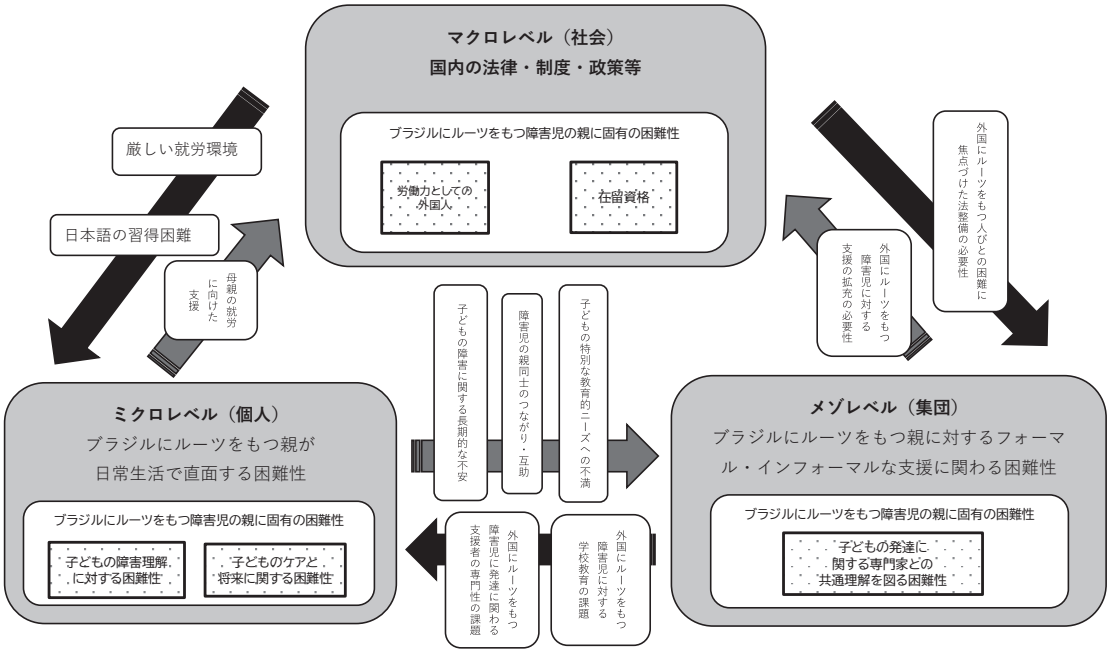

図３　インタビュー調査に基づくブラジルにルーツをもつ障害児の親の困難の分析的視点　筆者作成

まえた専門的対応が挙げられる。親の語りからは，保育や教育に関わる者の，ブラジルにルーツをもつことに関する理解の不足が浮き彫りとなった。したがって，保育者や教職員が，異文化や多様性を理解し，親や子どもへのエンパワーメント，社会福祉制度の利用も視野に入れた支援を行うことが求められる。

第３に，ミクロレベルにおける困難性の実態についてである。ブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親は，就労環境や子育てによる疲労や時間的制約によって，様々な困難性に直面している。また彼らは，長年日本語の習得を希望しながらも，その機会を逸していた。

日本語コミュニケーションの困難性は，日本の文化や社会的慣習などへの理解にも関連しており，保育園や学校に関わる困難を生み，日本語や日本文化を習得していく子どもとの間で，コミュニケーションの齟齬を生む場合もあった。

また，子どもの医療機関の受診時における通訳代の負担や，不安定な雇用形態によって，経済的な困難に陥りやすい状況も確認された。これらブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の困難性とその重層化を，当事者の自助努力で解消することには限界がある。

第４に，ブラジルにルーツをもつ障害児の親に見られる固有の困難性の実態についてである（図３）。日本語の理解とコミュニケーションの困難というミクロレベルの困難性や，メゾレベルにおける困難性である地域社会からの孤立については，健常児および障害児の親のどちらにも共通していた。

一方，障害児の親に固有の困難について，以下の３点が見いだされた。

１つに，障害児の親の長期に渡る子どもの障害に関する不安である。親は，早期から子どもの異変に気づき，医療機関にアクセスしていた。しかし，親の語りからは，医療機関で直面する日本語コミュニケーションの困難性が，子どもの発達や養育に関しての十分な理解を阻害し，親が不安を長期に渡って抱えてしまう様子が浮きぼりとなった。

２つに，冒頭で言及した，子どもの障害に対するケアの担い手が第一義的に親であるという前提（田

中，2020）による影響である。子どもへのケアの多くを親が行うことで，就労が制限され，家計収入が減ってしまう。このことは，日本でお金を稼ぎ，本国に送金する，あるいは貯金をして帰国するといった経済活動を困難にさせていた。そして，親は，子どもへのケアへの負担は，親世代の死などによって兄弟などの世代にも引き継がれ，家族の負担が軽減されることなく，彼らのライフサイクル全般に困難さが波及していく状況が明らかとなった。このような状況に対しては，近年いわゆる「親亡き後の問題」として，親が元気な時から子どもの自立をどのように達成していくかと言う観点で語られている。

本稿のインタビューの中で，Gさんは，自分達がケアできなくなった際には，次男がケアを引き継ぐことへの期待を語った。これは，障害のある長男を，将来にわたる家族がケアすることが前提であり，地域社会で自立した生活を目指すことが困難であるという現実を示しているといえよう。つまり，ブラジルにルーツをもつ障害児の親は，ライフサイクルを通して，社会的な支援による子どものケアの負担を軽減することが困難なまま，彼らの生涯を通じて子どもをケアし続けるという状況に陥っている。

3つに，学校教育に関して，親の子どもに対するねがいと，学校教育の方針や専門的対応との間での齟齬が生じることである。親は，自身が望む子どもへの特別な教育的ニーズに対し，療育や学校が提供する専門的な支援や教育の体制に不十分さを感じ，葛藤を抱いていた。そして，障害児の親は，子どもの発達を保障するための必要な方法を自ら模索する必要に迫られていた。

6．結論

本稿では，ブラジルにルーツをもつ健常児の親と障害児の親の両者に共通の困難性をミクロ・メゾ・マクロに分節化した上でその構造を分析し，さらに障害児の親に固有の困難性を明らかにすることを目的とした。本稿を通じて明らかとなった知見は以下の3点である。

第1は，ブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親の困難性について，マクロ・メゾ・ミクロの各レベルにおける困難の詳細が明らかとなった点である。今後ますます，自治体レベルで重層的支援体制の整備が進められていくことが求められる。

特にブラジルにルーツをもつ親に対して，日本語教育やコミュニケーションに関する公的保障が不十分であることが，彼らの生活における多様な困難を生み出していることが明らかとなった。

目的と背景で触れたように，A県は，ブラジルにルーツをもつ人びとが多く定住している自治体である。しかし，本稿によって明らかとなったコミュニケーションをはじめとする種々の困難性は，そのような自治体においても，彼らを未だ十分に地域社会に包摂できていないことを示している。

第2は，本稿でのインタビュー調査から，ブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親のミクロ・メゾ・マクロレベルの困難性の相互作用について明らかとなった点である。マクロレベルにおける諸要因が，彼らをサポートする社会的支援の質と量というメゾレベルにおける困難性に影響を与えている。この相互作用が，結果的にブラジルにルーツをもつ健常児および障害児の親を社会的に孤立させ，ミクロレベルにおける彼らの様々な困難につながっている可能性を示唆している。

第3は，ブラジルにルーツをもつ障害児の親の固有の困難性が明らかとなった点である。障害児の親は，ミクロ，メゾ，マクロレベルの要因とそれらの相互作用によって，健常児の親とは異なる困難性を強めていく状況が見いだされた。彼らは，子どものケアの主たる担い手であり，自らの来日目的である就労が得られないまま，葛藤を抱き，休息も得られず，子どものケア中心の生活を強いられている。その上で，子育ての早期から，乳幼児期，学童期という長期に渡る日本語やコミュニケーションにおける困難が，障害児のケアをさらに困難にしている様子が浮かび上がった。

1990年の入管法改正以降，多くのブラジルにルーツをもつ人々が，日本で経済的活動を行うために来日した。その後，日本の長期的な不景気を経て，2008年のリーマンショック後に，多くのブラジルにルーツをもつ人びとが失業した。そして，2009年には，日本政府による日系人帰国支援事業によって，Ａ県において1200人余りのブラジルにルーツをもつ人びとがブラジルに帰国した。一方，現在も4000人以上のブラジルにルーツをもつ人びとがＡ県に定住し，地域社会で子どもを育てている。

ブラジルにルーツをもつ健常児と障害児の親は，来日前からの母国と日本とを結ぶ就労ネットワークや，同胞や家族による互助・共助に未だに頼って生活している。本稿のインタビュー調査からは，地域社会における彼らと住民とのつながりが，現在も脆弱である事が明示された。脆弱性を抱えるブラジルにルーツをもつ障害児の親が，地域社会に包摂されるためには，本稿で明らかとなったミクロ・メゾ・マクロ的視点それぞれの困難性に対し，多様な支援の主体によって，全体的・包括的アプローチによる一貫性のある社会的支援へとつなげていくことが必要である。

注

1） 本稿においては，「ブラジルで生まれ，その後来日して暮らしている親」を「ブラジルにルーツをもつ親」と定義し，その子ども（健常児および障害児）を「ブラジルにルーツをもつ子ども（健常児および障害児）」という意味で用いる。また，文脈に応じて，他の研究や行政で用いられる「移民」「外国人」という表現も同義として用いる。

2） 国は，子育て支援を，一貫して少子化対策として位置づけて進めてきた。そして，子育てを社会全体で支えるというために，2003年には「次世代育成支援対策推進法」が制定され，各自治体の少子化対策や次世代の育成のために，具体的な行動計画を立てていくことが義務化された。同2003年には，少子化社会対策基本法が制定され，2004年には「少子化社会対策大綱」が閣議決定された。以降2020年の第４次少子化社会対策大綱に至るまで進められてきている。

3） 上記の少子化社会対策大綱では，４次，計16年にわたって子育て支援施策の検討・実施がされている。しかし，外国にルーツをもつ親と子どもに関しては，就学支援における公立学校の受け入れ促進，日本語指導の体制整備，不就学の子どもに対する対策等，限定的な言及に留まっている。

4） 厚生労働省「重層的支援体制整備事業について」（https://www.mhlw.go.jp/kyouseisyakaiportal/jigyou/）（2024年３月15日アクセス）

5） ここでいう自閉症とは，アメリカ精神医学会（APA）から2013年に出された精神疾患の診断・統計マニュアルである「DSM-V」によって「自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder：ASD）」と呼ばれるようになった，発達早期からみられる中枢神経の機能障害のことを指す。

6） 厚生労働省によれば，契約社員の場合，契約期間が１年の場合，５回目の更新後の１年間に，契約期間が３年間の場合，１回目の更新後の３年の間に，無期雇用への転換の申込権が発生するとしている。厚生労働省「無期転換ルールについて」（https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_21917.html）（2024年３月15日アクセス）

参考文献

原史子（2013）「外国籍子育て家族の実態と支援の課題：多様な家族支援の必要性」『金城学院大学論集．社会科学編』pp.48-55。

菱田博之（2021）「外国にルーツをもつ障害児の親の子育てにおける困難性の実態―長野県の中国ルーツをもつ親の経験における３つの観点からの考察―」『人間発達研究所紀要』第34号，pp.1-20。

菱田博之（2022）「ブラジルにルーツをもつ障害児の親の困難性の重層性と社会的支援の課題―インタビューにもとづく検討―」『立命館産業社会論集』第58巻，１号，pp.161-180。

藤後悦子・野澤純子・石田祥代（2023）「乳幼児および学童期を育てる外国人家庭の子育ての課題と必要な支援について」『東京未来大学研究紀要』vol.17，pp.199-208。

藤川純子・田邊正明（2021）「発達障害児を育てる外国

人保護者に対する支援の研究（1）」『三重大学教育学部研究紀要』72，pp.489-504。
藤本文朗・黒田学編著（1999）『障害児と家族のノーマライゼーション 滋賀の「障害をもつ子どもたちの実態調査」から』，群青社。
藤原里佐（2013）「複合的な困難性という視点からみる虐待と障害」松本伊知朗編『子ども虐待と家族―重なり合う不利」と社会的支援』明石書店，pp.61-74。
藤原里佐（2015）「障害者家族の困難性と支援の方向性―母親に偏在するケア役割めぐって」『障害者問題研究』第42巻，第４号，pp.10－17。
法務省「令和３年度末現在における在留外国人数について（報道発表資料）」（https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00001.html）（2024年３月15日アクセス）
梶田孝道・丹野清人・樋口直人（2005）『顔の見えない定住化―日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会。
公益財団法人国土地理協会（https://www.kokudo.or.jp/service/data/map/nagano.pdf）（2024年４月11日アクセス）
厚生労働省『「少子化社会対策大綱に基づく重点施策の具体的実施計画について」（子ども・子育て応援プラン）の決定について』（https://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/12/h1224-4.html）（2024年３月15日アクセス）
厚生労働省『子ども・子育てビジョン』（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/siryou/__icsFiles/afieldfile/2010/03/16/1290947_2_2.pdf）（2024年３月15日アクセス）
厚生労働省『第３次少子化社会対策大綱』（https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000081807.pdf）（2024年３月15日アクセス）
子ども家庭庁『第４次少子化社会対策大綱』（https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/834d4ee3-212d-4f35-aefa-6b795ebc913a/452ed544/20230522_councils_shingikai_kihon_seisaku_JapZTAT7_08.pdf）（2024年３月15日アクセス）
南野奈津子（2018）「特別な支援を要する幼児・児童の多様性と支援――外国人障害児に関する考察――」『東洋大学ライフデザイン学紀要』13，337-347。
三井さよ（2013）「＜場＞力――ケア行為という発想を超えて」三井さよ・鈴木智之編『ケアのリアリティ――境界を問い直す』法政大学出版局，pp.13－45。
永吉希久子（2021）「序章 移民の統合を考える」永吉希久子編『日本の移民統合』 明石書店，pp.26-27。
日本ソーシャルワーカー連盟（JFSW）「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」（https://jfsw.org/definition/global_definition/）（2024年３月15日アクセス）
大久保武（2005）『日系人の労働市場とエスニシティ』御茶の水書房。
総務省（2020）『地域における多文化共生推進プランの改訂（令和２年９月10日）』（https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01gyosei05_02000138.html）（2024年３月15日アクセス）
田中智子（2020）『知的障害者家族の貧困――家族に依存するケア』，法律文化社。
田中智子（2015）『子育てとケアの境界 家計構造からみた障害児ケアの困難性』「障害者問題研究」第42巻，第４号，pp.266-273。
高橋脩（2018）「外国にルーツをもつ障害のある子どもの実態と支援に関する研究」『平成28年度～29年度厚生労働科学研究費補助金障害者政策総合研究事業（身体・知的等障害分野）発達障害児者等の地域特性に応じた支援ニーズとサービス利用の実態の把握と支援内容に関する研究』
富谷玲子（2010）『地域日本語教育批判――ニューカマーの社会参加と言語保障のために――』神奈川大学言語研究，第32巻，pp.59-78。
山岡テイ（2007）『多文化子育て 海外の園生活・幼児教育と日本の現状（子育てサポートブックス）』学習研究社，pp.13－14。

謝辞

インタビュー調査にご協力いただいたブラジルにルーツをもつ親の皆様，ならびに通訳をご依頼した関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

Research Study on the Difficulties Faced by Parents with Brazilian Roots Who Have Healthy Children and Children with Disabilities in Prefecture A:

Deriving Social Support Issues through Analysis from Three Levels in the Parental Environment

HISHIDA Hiroyuki[i]

Abstract : The purpose of this paper is to analyse the results of interviews with parents with Brazilian roots who have healthy children and children with disabilities in Prefecture A, in order to analyse the difficulties common to both groups, and then to identify the difficulties specific to the parents of disabled children. As an analytical perspective, their difficulties were considered from the micro-, meso- and macro-level perspectives. Through the interviews, the common difficulties of parents of healthy and disabled children were discussed. At the macro-level, the status of foreign residents in the Japanese labor market affects the lives of parents with Brazilian roots. At the meso-level, they had difficulties with informal support, mainly with family and peers, with weak links to the local community, and with accessibility to municipal systems and services for childcare and education. At the macro-level, the reception of newcomers at the national level affected the lives of parents with Brazilian roots. In terms of difficulties for parents of children with disabilities, difficulties in Japanese communication affected their understanding of their children's disabilities, and work restrictions concerning the care of their children and conflicts over special educational needs were a physical and mental burden on the parents. In the future, when envisioning a society based on a symbiotic community, the reality of their difficulties needs to be recognised as an object of social support, based on the findings of this paper.

Keywords : parents with Brazilian roots, parents of children with disabilities, healthy children, children with disabilities, Japanese communication, isolation in the local community, visa status

i Doctoral Program, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University
Iida Junior College, Department of Early Childhood Education